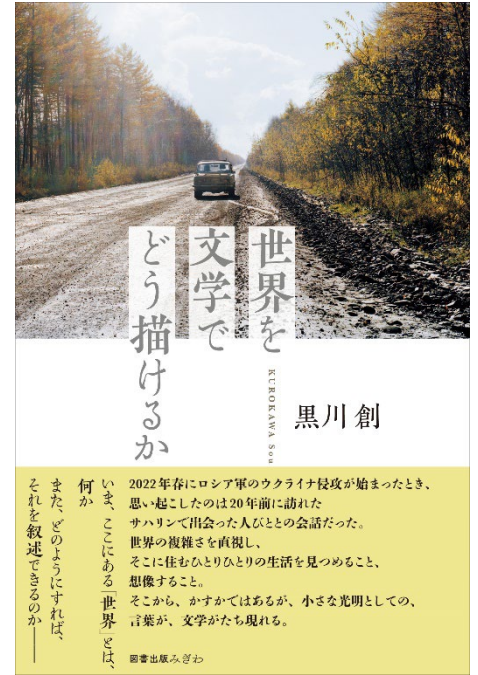


# 『世界を文学でどう描けるか』

黒川創／著

図書出版みぎわ

刊行記念フェア@東京堂書店



## はじめに

『世界を文学でどう描けるか』には、20年前のサハリンへの旅の回想が織り込まれています。本のなかにも登場するのですが、そのサハリンの旅の直後に書かれたのが、『イカロスの森』という小説（『もどろき・イカロスの森 ふたつの旅の話』掲載）。小説にも描かれていた人物が、『世界を文学でどう描けるか』にも登場するので、併せて読むと、それぞれの作品のつながりと、その間の時間の経過と変化を楽しむことができます。

2017年に刊行された小説『岩場の上から』は、黒川創さんの小説のなかでは異色ともいえる、2045年を舞台とした近未来小説です。家出をしたひとりの少年が、旅のなかで「社会」と出会い、成長をしていく物語。本書を読んだときにはわからなかったのですが、その後刊行された『旅する少年』を読んで、この『岩場の上から』で描かれた少年の心情や体験の背景には、作家・黒川創自身の経験がベースになっているのだろうと感じました。この2冊を合わせて読むと、作家が自らの経験をどのように小説にするのかがわかる気がします。

2021年刊行の『旅する少年』は、小学～中学時代に繰り返した一人旅の記憶を回想したものです。1970～80年代当時、著者本人が撮影した写真なども多く掲載していて、当時の旅を、読者も一緒に体験するかのように読むことができます。この旅の記憶とどこかつながるのが、小説としての最新作、『彼女のことを知っている』です。70年代の母親から、現代の主人公の娘まで、これまでに会った様々な「彼女」のことを思いおこしつつ、「性」が人生に何をもたらすのかを描いた長編小説です。

小説は、同じ作家の作品を読めば読むほど、その面白さが増していきます。関係する本を読めば読むほど、理解も深まっていくし、楽しみ方も増えていく。『世界を文学でどう描けるか』が、様々な本との出会いのきっかけになれば嬉しいです。

\* \* \* \* \*

## 【世界と文学のみぎわで】

『〈外地〉の日本語文学選1～3』 黒川創 [編] (新宿書房)

戦前に日本が植民地としていた台湾、朝鮮、満洲、樺太などで、日本語で書かれた小説を集めたアンソロジー。日本語を母語としない作家が日本語で書いた作品、その地で生活した日本人作家の作品、滞在が僅かであっても、その経験が色濃く表れている作品、を選んだもの。この本でしか読めなくなっている作品も多い貴重なシリーズ。

『国境 [完全版]』 黒川創 (河出書房新社) ※第25回伊藤整文学賞作

旧植民地を背景とした日本語文学の歴史と、そこから読み解くことのできるひとびとの精神史を論じる。漱石の「韓満所感」を組み込む形で書かれた小説『暗殺者たち』の思想的原型ともいえる。日本語で書かれた文学の歴史を提示した、その後の研究にも大きな影響を与えた一冊。

### 『世界文学とは何か?』 デイヴィッド・ダムロッシュ (国書刊行会)

「世界文学」という言葉によって、どんな作品が翻訳され、流通し、読まれていったのかを詳細に論じた一冊。ある作品が書かれた文化圏を超えて「旅」をする。その結果として、作品の意味が読み替えられていき、また新たな価値が生み出されていく。その旅の過程で作品は翻訳され、より豊かになっていく。文学とは何か、翻訳とは何か、という問いにぶつかったとき、折に触れて読み返す一冊。

### 『谷崎潤一郎の世界史 『陰翳礼讃』と20世紀文化交流』 西村将洋 (勉誠出版) ※編集担当本

ロンドンの書店で見かけた「ミニチュア・ヒーローズ」という特設コーナー。そこには、ロラン・バルト、ミシェル・フーコー、スーザン・ソンタグラの本に混じって、谷崎の『陰翳礼讃』が並んでいた。その光景からスタートし、『陰翳礼讃』という短い作品が、どのような世界史的背景のもとに書かれたのか、そしてどのように世界各国で読まれるようになっていったのかを丁寧に追っていく。

### 『ジャパニーズ・アメリカ』 日比嘉高 (新曜社)

1990年前後に北米に渡った日本人から、敗戦後の二世、三世たちまで、外地における日本人共同体の生活と、そこから生まれた日本語文学作品を考察する。永井荷風の『あめりか物語』や、有島武郎の「或る女のグリンプス」(『或る女』)といった有名作品から、戦後の知られざる作家の作品まで幅広く紹介。北米でなぜ日本語による文学が書かれるのか、それを誰が読むのかなど、文学という文化がどのように形作られるものなのかが見えてくる。

### 『忘れられない日本人移民 ブラジルへ渡った記録映像作家の旅』 岡村淳 (港の人)

ブラジルに渡った記録映像作家・岡村淳が、宮本常一よろしく現地で出会った多様な人びとを紹介していく。日系移民たちが、ブラジルでどんな仕事をしているのか、どんな生活をしているのか、そして彼らにとって日本とはどのようなものなのかを、対話の中から浮かび上がらせていく。その地に住まう人たちの日常と、そこに潜む歴史が伝わる本。

### 『わたしもじだいのいちぶです』 康潤伊、鈴木宏子、丹野清人 [編著] (日本評論社)

文学だけでなく、歴史もまた、日本語でしか書きえないものがある。川崎に住む在日一世のハルモニ(おばあちゃん)たちが、識字学校で読み書きを学んで、自分の思い出、経験を綴っていく。「文字を学ぶことは、世界を認識することであるといえる」と解説で康潤伊が書くように、ハルモニたちの文章からは、これまで誰も語ってこなかった世界が、生活が見えてくる。何より、本のタイトルがとても良い。

### 『日本移民日記』 Moment Joon (岩波書店)

いまでも新しい日本語文学は生まれ続けている。韓国出身の日本語ラッパー、と表現されることを拒む Moment Joon の言葉によって、自分の無自覚な発言や考え方を強く揺さぶられた。社会とは、その共同体にいるひとりひとりによって作られるもの。社会に僕らが合わせるんじゃなくて、ここに住まう僕らすべてが社会だ、と長年もやもやしていた思いが本書を読んで言語化できた。2020年リリースのアルバム『Passport & Garçon』も良い。

### [番外編]

### 『民族衣装を着なかったアイヌ 北の女たちから伝えられたこと』 瀧口夕美 (編集グループ SURE)

今回のフェアで紹介することはできなかったのですが、編集グループ SURE から刊行された本書は、『世界を文学でどう描けるか』と対にもなる一冊です。阿寒湖畔のアイヌ・コタンで生まれた著者が、2000年のサハリンへの旅とそこで出会ったきっかけに、アイヌの歴史、そして「自分の歴史」を見つめなおしていく。『世界を文学でどう描けるか』と同じ旅を描いた、対になる一冊です。ご注文は <https://www.groupsure.net/>へ。

## 図書出版みぎわについて

「世界を変える言葉を届ける」をモットーに、2022年12月、千葉県流山市を拠点にスタートしたひとり出版社です。一冊の本が、人と人をつなぎ、社会に広がり、そしてほんの少しだけでも、社会が、世界が良いものになっていく。そんな本を作ることを目指しています。社名の「みぎわ」は「水際」、つまり水面と陸面の境界線を指す言葉です。固定化した価値観を揺さぶるような、おかしな社会を流動化することができるような本を作る、という思いを込めました。

設立者：堀郁夫（ほり・いくお）

1983年、茨城県水戸市生まれ。大学卒業後、勉誠出版、春陽堂書店で営業から編集まで、幅広く出版業務を経験。2022年、図書出版みぎわ設立。小説、アンソロジー、人文書、研究書、図録など、これまでに100冊を超える本を編集。主な担当書籍に、溝井裕一『水族館の文化史』（勉誠出版、サントリー学芸賞受賞）、黒川創『旅する少年』（春陽堂書店）など。



\* \* \* \* \*

### 【編集した、関わった本たち】

『水族館の文化史』溝井裕一（勉誠出版）、『環境人文学Ⅰ 文化のなかの自然』『環境人文学Ⅱ 他者としての自然』野田研一・山本洋平・森田系太郎／編著（勉誠出版）、『パブリック・ヒストリー入門』菅豊・北條勝貴／編（勉誠出版）、『「私」から考える文学史』井原あや・梅澤亜由美・大木志門ほか編（勉誠出版）、『野蛮の言説』中村隆之（春陽堂書店）、『匂いと香りの文学誌』真銅正宏（春陽堂書店）、『芥川賞候補傑作選 戦前・戦中編 1935-1944』鶴飼哲夫／編（春陽堂書店）など

### 【こんな本が作りたい！】

#### 『ラディカル・オーラル・ヒストリー』保莉実（岩波現代文庫）

初めてこの本を読んだときは衝撃だった。「歴史する(Doing History)」という言葉は呪文のように広がっていき、歴史学、民俗学、文化人類学はもちろん、他分野の研究者を刺激し、新しい研究につながっていった。読者をアジェンションするような文体に感化され、気が付けば、「自分も実践者として何かせねば！」と考え始めてしまう。その結果として、ひとりで出版社を始めたりしてしまう恐ろしい本。ちなみに、本書と出会えたのは、池澤夏樹『氷山の南』に参考文献として記載されていたことがきっかけでした。

#### 『都市空間のなかの文学』前田愛（ちくま文庫）

いまなお日本近代文学研究に大きな影響を与えている前田愛の代表作。文学と場所をつなげて読むこと、考えることの面白さを最初に教えてくれたのがこの本でした。これまでに自分が関わって刊行した本を眺めると、「僕は前田愛の手のひらの上で本を作ってるのではないか!？」と思わされてしまうぐらい、影響を受けています。

#### 『春を恨んだりはしない 震災をめぐって考えたこと』池澤夏樹（中央文庫）

『世界を文学でどう描けるか』の原稿を最初に読み終えたとき、『春を恨んだりはしない』を読んだときに近い印象を持ちました。いま目の前で、どう言葉にしてよいかわからない事態が進行している。それをどう捉えればいいのか、どう考えればいいのかわからない、という時に、言葉を与えられたような感覚です。震災直後に刊行された本書もまた、思考の指針を与えられた本でした。

### 『パンとペン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い』黒岩比佐子（講談社文庫）

アナーキスト幸徳秋水とともに語られることが多い堺利彦の生涯を描く評伝。その人生と生き様、そして著者黒岩比佐子の文章に引き込まれて、刊行当時一気に読んだ。社会主義者という言葉は肩書ではない。その実践のために、堺が筆の力でどのような活動をしていたのかが生き生きと伝わってくる。売文社の広告に記された「パンとペンの交叉は即ち私共が生活の象徴であります」という言葉は、現代のひとり出版社をも励ましてくれる。

### 『埴原一亟 古本小説集』山本善行撰（夏葉社）

戦後古本屋として生活をしながら、小説を書き続けた作家の、古本に関わる作品を集めた一冊。埴原もまた、敗戦直前に樺太へ移住している。その後の抑留、引揚げ経験が綴られる「ある引揚者の生活」の一場面、日銭を稼ぐために古本屋を開き、家族三人で開店祝いをしている最中に、ボソッと、「俺はいいものを書くよ」と主人公がつぶやく場面がとても印象深い。夏葉社らしい、静謐な装丁、シンプルな帯も良い。

### 『新宿書房往来記』村山恒夫（港の人）

2010年頃から、僕も含め、ひとりや少人数で出版社を始める人が増えている。私見ではあるけど、1980年代もまた、小規模出版社が増えた時代だったと思っている。その時期にスタートし、50年以上にわたり本を刊行してきた新宿書房の村山さんが、新聞や雑誌、自社のHPなどに書いてきた文章をまとめた一冊。これから出版社を始めよう、と考えていた時に読み、刺激を受けたし、大いに感化された本。

### 『なぜ戦争を描くのか 戦争を知らない表現者たちの歴史実践』大川史織／編著（みずき書林）

小説、漫画、絵画、音楽、映画、ドキュメンタリーなどなど、戦後に生まれた表現者たちが、自分が直接経験をしていない戦争を、なぜ描くのか、どのように描くようになったのか。インタビューと対談をもとに、戦争との出会いから、描くことで知ったこと、感じたこと、そして描いたことで思ったことなど、それぞれの思いを引き出していく。インタビュアー大川さんは、本人がドキュメンタリー映画の監督でもある。表現者たちの様々な声が集まっている。

### 『したてやのサーカス』曾我大穂＝監修協力／高松夕佳＝聞き手・編（夕書房）

音・布・光が作り出す空間芸術集団・仕立て屋のサーカスについて、その首謀者である曾我大穂をはじめ、サーカスのメンバー、そのライブに巻き込まれていった人びとへのインタビューを元に編まれた一冊。インタビューの聞き手であり、編集者であり、そして本を刊行した夕書房社主の高松夕佳さんの、仕立て屋のサーカスの魅力を伝えたい！ という熱い思いが伝わってくる。自分で取材して、まとめて、本を刊行するって、すごい。

### 『凜として灯る』荒井裕樹（現代書館）

1974年、日本で開催された「モナ・リザ展」初日、抗議を叫びながらその名画に向けてスプレーを噴射した女性がいた。なぜその行為に至ったのかを、女性の半生を丁寧に追いながら描いた一冊。女性であるがゆえに、障害者であるがゆえに、抑制されてきた思いが解き放たれていく様は感動的ですからある。

### 『第二世界のカルトグラフィ』中村隆之（共和国）

書物が作り出すここではない世界＝第二世界をめぐる旅に連れて行ってしてくれる。そこには、パトリック・シャモワゾー、エドワード・グリッサン、マリーズ・コンデ、トニ・モリスン、ヤンポ・ウォロゲム、目取真俊、崎山多美、李龍徳らが集まる、「国家でも、故郷でも、国でもない」場所がある。本のなかにはまだ、理想や希望が詰まっている。その理想をまずは夢見ること。そこから、現実の変容が始まる。

（以上、文責：堀郁夫）